

Title	経済価値論管見 波多野鼎氏の近著「価値学説史」を読みて
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.1 (1931. 1) ,p.102- 117
JaLC DOI	10.14991/001.19310101-0102
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310101-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟價值論管見

波多野鼎氏の近著「價值學說史」を讀みて

永田清

本稿はもと新刊紹介の意味に於て草したものであるが、説くところ必ずしも波多野氏の著書に就てのみでなく、且つ價值論全體に對する卑見をも併せ述べた爲め、姑く前記の表題を課すことにした。讀者の寛恕を乞ふ次第である。

ジョン・スチュアアト・ミルは、一八四八年其の經濟學原理の初版に於て、「價值の法則に關しては幸にして今日若しくは將來の學者が解決すべき問題は幸にして一も存せぬ。この主題の理論は完全である」(註一)と公言して居る。こゝにミルの稱して完全となす價值論が生産費説たることは無論である。併し乍ら、斯るミルの言葉は文字通りに受容出來ぬ。蓋し生産費説其れ自體に對する批判は姑く措くとするも、事實上ミル以後に於る價值論究は跡を斷たず、例へば、限界利用學說の創唱と其の發展、勞働價值説其れ自身の深化と其の展開、或は折衷學說に於る多元論的歸結、且つ又、近時に於る價值論放棄説等の存在其れ自體が明らかにミルの自負を裏切つて居るからである。經濟學上に於ける價值論は、今日未だ確然たる解決を見ざる難問題の一つであらう。

然らば、斯る「價值觀の混沌」、その昏迷と紛糾とは何處より生じたるか。學說史的に謂へば、ミスが價值なる語を「使用上の價值」と「交換上の價值」と謂ふ二箇の異なる意義に解したるときに始まる。ミス並にリカードに從へば、「前者はある特定物の效用を謂ひ表し、後者は其物の所有に由りて取得する他貨物購買力を意味する。然るに、使用上の價值最も大なるものが交換上の價值を有すること僅少若しくは皆無なることが屢であり、又反對に、交換上の價值最も大なるものの使用上の價值が僅少なるか皆無なるかのことがある」(註二)。この「價值の二律背反」は、併し乍ら、ミスをもリカードをも悩まसानかつた。事實上、このことは、「價值なる言葉が二個の異なる意義を有す」と做すものには、何等の疑念をも惹き起さないからである(註三)。リカードは、この二律背反を引用することに由り反つて、效用が交換價值の尺度をなすものに非ずして單に必要な前提條件を構成するにすぎぬと考へた。「效用は交換價值にとつて絶對的に欠く可らざるものではあるが、其の尺度ではない。若しも一貨物にして、如何にしても有用ならざるものであつたならば、——換言すれば、如何にしても吾人の満足に寄與すること能はざるものであつたならば、……その物は全然交換價值を欠くであらう。既に效用を有するものとすれば、諸貨物の交換價值は二個の泉源より生ずる。即ち貨物の稀少性からと、これを取せんが爲めに要する勞働量からとである。貨物の中には、……其稀少性のみによつて其價值の決定せらるゝものがある。……併し乍ら、此等の貨物は、日々市場に交換せらるゝ貨物大量中甚だ小なる一部分を構成するに過ぎぬ。欲求の對象たる諸財中の遙に最大なる部分を占むるものは、勞働によつて獲得せらるゝものであるから、貨物を論じ、其交換價值及び其相對價格を支配する諸法則を論ずるに當つては、常に人間の努力によつて其數量を増し得べく、且つその生産上に競争の制限なく作用するが如き貨物のみを意味するものである」(註四)。

リカアドオは略、以上の如き前提條件のもとに、「困難なる價值の問題」に就て「爲し得べき最善の考慮を盡し」、「綿密周到なる推敲を経て一層充分に之を説明せんと試みた」けれども、其研究は、彼れ自身の言を以てすれば、失敗に終つて居る。即ち屢々引用せられるマルサス宛書簡（一八二三年八月十五日附）の一節に斯う述べて居る。「予の貴下に對する不平は、貴下が吾人に精確なる價值尺度を與へたと主張することに在る。予は此權利主張に反對して次のことを謂はふと思ふ——『予は成就し、貴下は失敗したと謂ふのではなくして、貴下も予も共に失敗した』」（註五）。斯る失敗の原因は、勞働と利潤とに歸屬する比例の異同に關する困難に在る。同額の資本が必ずしも同量の勞働を雇傭せざるの現状は、リカアドオの如く勞働價值と自然價格とを同時に理解せんとするものにとつては、困難なる材題を提供するものであり、且つその事自體が價值論を爾後益々紛糾せしめた一原因と見て宜いであらう。

抑、價值現象には價值を認むる主體と價值の認めらるる客體と其主客兩體との間に價值の認めらるる關係の存在が必要である。即ち價值を認むる主體が一個の要求を持して對象に向ひ、其對象が其要求を充すに足るべき能性を有すと主體に認められ、而して評價主體の要求と其對象がこの要求を充たすこととの間に何等かの意義に於て一定の障礙あることを要する（註六）。英吉利正統學派の價值論は斯る客體を其研究對象とし、價值を以て直に交換價值と做した。然るに一八七〇年代に擡頭せる限界效用論者は、主體の心理的解剖より出發して交換價值の原因を究明せんとした。正統學派は天才的燭眼を以て經濟法則を確立したが、遂に是を基礎とした統一的説明に到達しなかつたのは交換價值に注意を集中し、使用價值に就て檢覈を怠つたからである。即ち此點に正統學派の大なる欠陥が存する。現代の限界效用説は、吾人の幸福と財貨との關係に無數の差異が存し、此差異が、他人との交換關係に於て頗る重要となり來るの事實を提示する。斯くの如き論究に由て經濟理論のルネサンスは齎らされたのである（註七）。斯くて使用價值は限界の概念と結合して價值論上に新しき地位を確保した。然し、この限界效用説は、社會現象としての交換價值の原因論的説明たらんとするときは、大なる困難に遭遇するであらう。

尤も、この價值論は斯る困難を克服する爲めに近時特殊の發展を経つゝある。この展開と相並んで、又主觀論と客觀論との折衷が試みられた。マーシャルの價值論はその一例である。效用と費用ととの孰れが果して價值を支配するかとの間に對して、彼れは其の孰れも單獨に價值を決定するものでない事を示す爲めに、此二者を缺の双刃に喩えた。「價值が效用によつて支配されるか生産費によつて支配されるかを論ずるは、缺の上刃が紙を截るか下刃が截るかを論ずるに等しからう。洵に一方の刃を動かさずして截斷を行つた場合、その截斷は他方の刃によつてなされたと不用意に言ひ放つて少しも差支ない、併しこの言葉は嚴密に謂へば精確でない。通俗なる説明以外、嚴密なる科學的説明には許すことが出來ないのである」（註八）。斯くして、この單なる比喩が示す通り、價值論は遂に一元的明確性の喪失に終つて居る。

斯る紛糾は他面價值論無用説を生むに到つた。經濟學上に於る價值論は正に危殆に瀕して居る。カッセルの如きは明らかに價值論の學理的價值を否定するものである（註九）。固より、斯る論者は價

價值論が難解なるの故にこれを逃避するものではない。經濟學上價值論を説くことは、論理上不可能なことであつて、「價值の唯一原因を説くこと自體が、經濟現象に關する無知を暴露すること以外の何物でもない」(註一〇)と謂ふのである。

姑らく價值論無用説を其のまゝ、認容するとしても、價值の規定を俟ずして如何に價格を、又諸分配概念を説明するかの問題は残るであらう。況んや、この説に對する批判検討を求むる者にとつては、從來の諸價值學説に對する充分なる理解を必要とする。

斯くして、價值論は、肯定的意義に於ても否定的意義に於ても、依然として理論經濟學の中心問題である。價值決定の原理は、經濟事象の本質的統一的把握を可能ならしめる。これ、經濟學が價值論を樞軸として展開し來れる所以である。

この故に、吾が理論經濟學界に於ても、近時、價值論に關する幾多の力作が著された。今假りに著書出版年月順を以て其の主なるものを列擧すれば、森耕二郎氏「リカアド價值論の研究」、堀經夫氏「リカアドの價值論及び其の批判史」、小泉信三氏「リカアド研究」及び「リカアド」經濟及租稅原論(經濟學古典叢書)解題、高田保馬氏「經濟學新講」(第二卷、價格の理論)、波多野鼎氏「價值學說史」全三卷等がある。

森教授の前掲書に就ては、本誌二十卷三號に内容全般に亘る精緻な紹介があるから、再び茲に繰り返さぬが、該書は「先進學者の研究の綿密なる涉獵に基づき、而かも其間幾多の獨創的なる工風の跡を示せる、リカアド研究者の看過すべからざる著作である(本誌二十二卷三號參看)。氏が

價值論研究の發足に當つて先づリカアドを其對象とせられたのは當を得て居る。「リカアドは其價值論を以て單に商品交換の原理たらしむるにとゞまらず、經濟現象を本質的に規定するところの基本的關係の解明の指導原理となし、外見的諸運動と事實的諸運動との衝突矛盾は如何に相關聯するかを闡明せんとし、以て實踐的にして科學的なる彼れの經濟學を樹立したることは、洵に經濟科學に於ける彼れの偉大なる歴史的功績である」と謂はねばならぬ。彼れは「十九世紀の最も影響多き經濟學者であり、」従つて、「吾人の學問領域に於ける課題は他のものを以て彼れに代らしめることではなくて、彼れの思想を理解し、之を大成すること」だからである(註一一)。森教授はこの研究に於て結局次の如き結論に到達して居られる。「私は、彼れの修正あるに拘らず、彼れの價值論は依然として勞働價值論として残り、その基礎に於てそれより離るゝことが出来なかつたと思ふと同時に、この二つの相矛盾せる態度を彼リカアドに於て見出すことを否認するわけに行かぬのである。然らばこの彼れの勞働價值論に對する曖昧なる態度は一體何を意味するか、リカアドが斯様に彼れの勞働價值説の不十分なることを認めんとする態度と、それに執着せんとする態度との二つの態度をとつたのは、この態度を裏づける矛盾の現象をよく見得たによるものであつて、それはリカアドの功績であるに拘らず、彼れはこの矛盾の現象を矛盾の現象として即ち資本家的生産方法の必然的現象として見、さうしてそれを彼れの價值論から説明することを爲さず、それを彼れの價值論の矛盾として遂にそれに一種の修正を加へるに至つたものである」と(該書五〇六―八頁參看)。この解釋は無論マルクスのリカアド批判を基礎とするものである。

等しく、リカアドオの價值論を研究對象とし、其勞働價值説はマルクスに至つて完成したと説くものに堀博士の大作前掲書がある。該書は二篇に分たれ、第一篇に於てはリカアドオの價值論及び價格論の分析、並びに斯論に對する批判の歴史が取扱はれ、第二篇に於ては勞賃論に就て同様のことが做されて居る。解釋の主力は、結局、第一篇に注中せるものの如くであるが、其は事實そうならざるを得なかつたであらう。蓋し、第一篇は一般貨物の價值及び價格に關する理論であり、第二篇は單に特殊貨物としての勞働力の價值及び價格に關する理論にすぎぬからである。博士は結局リカアドオの價值論をどう解釋されるか。謂ふ——リカアドオが勞働價值論を「修正」せざるを得ざるに至つたのは、彼れの與へたる種々の説明が如何なるものであるかを問はず、實は、資本主義社會の進歩と共に益々顯著となる所の利潤平均てふ實際の事實、即ち投下された全資本に對して計算する、利潤の率が益々平均して來るといふ事實の認識である。而して、彼れが其勞働價值「修正」論の一部をなすものだと看做して居る所の、勞賃の騰落に本づく價值の變動の容認は實は勞働價值論の修正を證明するものではなくて、勞働價值の「轉化」形態たる生産費若しくは生産價格に對する勞賃變動の影響を説明するものである(該書五七二—二頁參看)と。博士に従へば、「マルクスは勞働價值説の完成者である。蓋し彼れはリカアドオの學説を十分に理解し、しかも正當なる論理を以てこれを發展せしめたからである。而して彼れの功績の中最も大なるものは、勞働價值より生産價格への「轉化」を論じて、リカアドオを眞に惱ました所の難點を解決したことである」(同五七七頁參看)と。

此等の解釋と正に好對照の地位をとるものに我小泉教授の「リカアドオ研究」がある。この書の出版は稍、前二著に遅れて居る。然し、その例言にある如く、「リカアドオの價值論」の章は既に本誌十六卷二號より九號迄の間に發表せられたものであり、我國に於るリカアドオ價值論に關する最大の力作である。教授の「研究」はデュール、ホランダーに比肩すべく、其は又リカアドオ研究者にとつてマルクスの「剰餘價值學說史」と共に並び讀まらるべきものである。

以上の著書は皆リカアドオの價值論を中心とする學說史的研究であるが、高田博士の近刊書「經濟學新講」第二卷は、これ等と異つて、價值、價格理論の平面的基本的研究である。私は現在我が學界に於ける最大の原論書たる「新講」全卷の完成を俟つてその全般に亘る紹介を試み度いと思ふから、茲にこの卷の内容に及ぶ紹介をさし控へるであらう。唯だ博士が一般均衡理論と強力説とを結びつけられる論據に就ては充分に讀者の注意を促さねばならぬ。私は、既に本誌上に發表した二三の論文(註二二)に於て述べた通り、交換形式を中心として經濟現象を分析すれば結局平衡論に到達するし、而して其は最も精確なる需要供給の法則であるから、嚴密なる意義に於る價值本質論とはならなくなるであらうと思ふ。素より價值論は社會的なる價格現象の因果論的説明となり得る意味に於て甫めて存在の理由をもつものである。従つて價格現象を社會的綜合現象と看、一切の個別的部分的游離方法を避けて價格生成の發展過程を綜合的に靜觀し、且つ價值其れ自體の現象的分析に由て其の生成を充分に説明し得ると做すものには、價格論は不必要であり、且つ不可能事に屬する。YがXの函數なる時、其Yの一々の點はXの函數に由て定められる進行の原理を表す。これを示すものが即

ち微分係數であつて、其はYなる變數の生成發展の原理をXの函數を用ひて規定するものに外ならない。函數の表す變數Yの進行の理由は、其の個々の點に於る進行の方法を $\frac{dY}{dX}$ に由り表さしめる。變數Yは微分係數 $\frac{dY}{dX}$ の示す生成の原理を荷ふ數位の綜合に由て生成せられるのである(註一三)。この故に、同時的決定の函數論的規定を核心とする一般均衡の理論と所謂繼續的因果論としての價值論とは兩立し難きものとなるであらう。

以上の諸書は皆價值論研究者の必ず逸すべからざる力作であるが、更にこれ等の文献に波多野教授の「價值學說史」全三卷が加へられた。教授の「價值學說順禮」は、第三卷折衷學派の價值學說の完成によつて、「略、一つの重要なコースを終り得た」やうである。

第一卷は正統學派の價值學說研究であつて、スミス、リカード及びマルサス・ミルの三章に分たれて居る。然し、頁數を費すことの最も大なる點から見て、又論述の最も精彩に富めることから謂つて、主力を注がれのは第二章リカードの價值學說であらう。それはそうならざるを得ない理由がある。素よりスミスの價值論は其自體研究の價值を有する。例へば、スミスが社會發達の段階を、資本の蓄積並に土地の占有未だ行はれざる初期草昧の社會とその既に行はれたる後の社會とに分ち、それに應じて二元の價值法則を樹てたる意味、從つて生ずるスミス價值論に於る眞意の曖昧、或はその價值論と地代論との矛盾の指摘等はスミス價值論の解釋として重要なものである。併し乍ら、スミスの半途彷徨はリカードによつて一往整理せられた。即ち價值學說史上から謂へば、スミス價值論はリカードに於るその思索の出發點となつたと謂ふ意味に於てのみ最も大なる存在の理由をもつものである。マルサスに至つては、假にド・クインシーの痛撃を受容せずとするも、其の支配勞働説はスミスの文明社會に於る價值法則を單に繼承したるにすぎず、特にシニョア、ジョン・スチュアート・ミルは、リカードの時間なる要素をより明瞭なる言辭を用ひて之を現し、自然價格の説明を益し、生産費説へ轉向せしめたにすぎぬと謂ふべきであらう。斯くして、この第三卷は結局、小泉、堀、森諸教授の研究と同一問題を對象とする點に於て特殊の興味を惹くのである。

先づ問題となるのはリカードに於ける價值概念の意味である。ディールはリカードに於る眞の價值概念が相對價值なる所以を次の如く説く——「リカードの語法嚴密ならざる爲め、多くの不明瞭を招いて居る。然し、其の解釋に就ては何等の疑がない。彼れが「眞實價值」或は「不變價值」を論ずる場合も、彼れの價值概念は常に「相對價值」の意味である。即ち財貨Aが他の財貨と比較して幾許の價值を示すかを説明せんと欲したのであつて、Aが其れ自體幾許の價值を表現し、若しくは含有するかを説明せんとしたのではない」(註一四)と。小泉教授の解釋はディールの斯る説明に反する。曰く——「固よりリカードの詳論するところが相對價值に在つて、絕對價值でなかつたことは勿論であるが、併し絕對價值の觀念が全然彼れの念頭に存することなかりしを斷言するは稍、過ぎたるを覺える。上記の引用句に照して、彼れの相對價值論の底に稍々茫漠たる一種の絕對價值論があつたものと解するは決して不當と評すべきでない。たゞ絕對價值を論じて、一定量勞働の體現せられた貨物は、其自體單獨に一定額の價值を有すと主張せんが爲めには、先づ異種の勞働を一定の標準勞働に約元して、その一定量を以て直ちに一定額の價值を生み或は含むものとなさねばなら

ぬが、リカアドオは輕くこの問題の表面に觸れて通過したから、彼れの絶對價值論は遂に成形發展する基礎を得ずして終つたと謂ふべきである」(註一五)と。

この點に關する波多野教授の結論を茲に摘記すれば斯うである。「相對價值の究明をその課題とするリカアドオは、當然に、眞實價值の究明にまで進まなければならぬ、そして眞實價值を究明せんとすれば、異質労働の等質化をなさねばならぬ。けれども異質労働の等質化はリカアドオにとりては不可能であつた。そこで彼れは異質労働の問題が迫り來るときには、自己の課題が相對價值に在ることを宣明することによつて難關を避ける。けれども相對價值は眞實價值の表現に外ならぬから、彼れは眞實價值を考察圏外に驅逐することを宣言しながらも、常にそれを前提としてゐるのである、爾かせざるを得なかつたのである」(該書一〇六頁)と。リカアドオに於る語法の不明確と價值概念の漠然性を最初に指摘せる者はサミエル・ベエリイであつた(註一六)。而して労働の價值なる分析に就ては、吾人は之をマルクスに學ばねばならぬであらう。

次にリカアドオに於ける労働價值説の「修正」なる問題がある、波多野教授に従へば、「リカアドオは労働價值と自然價格とを明確に區別して把持することが出来なかつた」(該書一四七頁)。この差異は「個別利潤と平均利潤との差異である。この差異は理論的には極めて重大なる差異であると謂はねばならぬ。然るにリカアドオはこれを明確にすることが出来ず、利潤の本質をもつて商品價值の分解部分であるとの見地に徹底しえずして、市場提供に要する時間の長短に應じて配當されたる『余剰』をも、分解部分としての利潤と同一視してゐたために、労働價值と自然價格との異同を明かにすることが出来ず、従つてまた、その價值法則修正論の意義を的確に把握してこれを發展せしめることが出来なかつたのである」(該書一四八―九頁)。無論この解釋は新奇なものとは謂へぬし、且つその價值態様も委曲を盡したものと謂へぬ。蓋しこの問題は當然マルクスの労働價值其自體の分析解明と結びつけて論ぜらるべきだからである。然しこの問題をリカアドオに於ける生産費なる概念の漠然性及び、分配論上の諸概念との連繫に於て一層明確に解かれたるは示唆に富むものとは謂はねばならぬ。惟ふに、商品價值の分析は單なる交換上の形式からのみ説き得るものに非ずして、當然、生産並に分配の諸概念と結びつかねばならぬからである。

リカアドオの價值論を以上の如く解釋すれば、ミルの價值論に對する次の如き批判は當然生起し來るものである。「商品の價值は賃銀と利潤とをその内容とする生産費によつて規制される、それは兩者の機械的な合計である。然し他方において、労働の費用と利潤とは有機的關係を保つ。商品價值は一個の有機的全體であり、利潤と労働の費用とはその分解部分である。それならば、先づ商品の價值が與へられねばならぬではないか。こゝに吾々はスミスにおける困惑説に再會する」(該書三二九頁)と。

第二卷は墺國學派の價值學説であり、メンガー、ウィーザー、及びボエーム・バヴェルク三者に於ける價值價格論の理解と批判とに充てられて居る。立論の意圖は、假りに、ボエーム・バヴェルクが謂ふやうに、正統學派はその労働價值説においては「事實のスキラ」に當つて碎け、その費用學説においては「明白なる説明循環のカップデイス」の中に陥らざるを得なかつたとするも、果して

塊國學派其れ自體の限界利用説が完全に循環論理から逃れ得たかどうかを明らかにするに在るであらう(第二卷一三頁參看)。

限界利用説が孤立經濟において發見された價值法則であることは明らかである。然らばこの法則が交易經濟においても妥當するや否や、或はまた、交易なる契機の介入にも拘らず妥當するや否やは塊國學派價值論の試金石である。又事實上、限界利用説に對する批判をこの點に向けることは最も容易である(註一七)。然しこの論者の如く、人間社會の複雑なる關係を一個の與へられたる全體性と看す、個人の單なる集會として *Nebeneinander* の關係に於て理解するものにとつてはこのことは問題にならぬ。これ、限界利用説が原子論的と稱せられる所以である。素、限界利用説はこの原子論的考察と條件の變化を許さざる所與の設定とを前提とする。然るに價值論は個人の評價過程のみの説明では不充分である。否寧ろ何等かの意味に於て價格の原因論的説明となることが必要である。事實上、限界利用説はこの價格現象の本質的把握を目的とする。併し乍ら、この説は社會的價格現象を究明せんとすれば、結局、論理上の過程に於てある種の價格概念を豫想しなければならなくなる(註一八)。この故に波多野教授が「彼れ等の全理論は循環論に陥つてゐる。而してこのことは、交易經濟における價格現象が問題たるかぎり——そして經濟學においてはこれのみが問題であるが——個人の欲望と彼れの消費財との關聯が即ち限界利用が、價格現象の『終點』でもなく、またその『根源』でもないことを立證するものである」(二卷三〇四頁)と謂はれるのはこの意味に於て正しい。現にアモンが「價值構成の問題に於ける個々の事柄に關しては、限界利用學説の中に於ても亦種々の異説が存する。即ちある一部のものは、利用並に限界利用を數學的に計量し得と謂ふ誤れる思想を基礎として居る。然し、價值構成の正しき理解は次の事實の認識に基くものである。即ち種々なる財の價值は孤立的に併存するものでなく、且つ獨立に各々別々に形成せらるゝものでもない。一つの全體として構成せられ、全體として變動する價值體系の大さたる相互依存關係に於て存在するものである」(註一九)と謂つて居るのは、限界利用論者内部に於て既に、游離的概念としての限界利用説が支持し得なくなつた所以を明示するものと謂へやう。

今姑く前記二卷の主題たる正統學派の價值學説と塊國學説のそれとが正しいものとすれば、吾々は果して其孰れを採るべきであるか。この問に對する一つの解答としてマーシャル、ディーツェル等の折衷論がある。波多野教授が第三卷に折衷學派の價值學説を説かれたるはこの意味に於てであらう。

この卷に於て「ディーツェルはその方法論に於て利用學派と全然同一の立場に立つものであり、而してその折衷論の中心點が「費用概念の主觀的規定にある」(第三卷四七七八)と謂ふ結論と、「マーシャルの努力はむしろ利用學説の支配に對する對抗にその目標が置かれ、「價值及び價格理論における生産の契機の重要性を力説する點に於て正統學派の傳統が彼の中に生きて居る」(第三卷二二五—六)との論斷とは充分注目に價する。併し乍ら、個人的な揣摩を許さるゝならば、著者は、折衷論者に通有な漠然性の爲めに、前記二卷に於ける如き興味を一部失はれたるものの如くである。些か極言の嫌はあるが、事實上、折衷論者は恐らく半途彷徨の評語を避け得ぬものであらう。マアシャ

ルは鉄の例を以て折衷の必要を説いて居るが其は單なる比喩以外の何物でもない。私は、既に前述した様に、交換の形式から經濟現象を分析すれば結局一般的平衡の理論に到達するであらうと思ふ。従つてマアシャルの部分均衡の理論はその中途に停止せる不徹底なものではあるまいか。

全卷三冊通計千頁に垂んとする波多野教授の價值學說史はこの折衷論を以て終つて居るが、經濟學上に於ける價值論究は無論是を以て總べてを盡したものと謂へぬ。例へば、價值論全體の放棄を主張する價值說無用論、前記の平衡學說、並に勞働價值說の深化形態としてのマルクス價值論の分析等が擧げられる。此等價值論の解説並に批判が前記三卷に更に加へらるゝならば、教授の力作は價值論に關する無類の大著となるであらう。

(昭和五年十一月十日稿)

- (註一) J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by Ashley, 1920 p. 436.
 (註二) A. Smith, The Wealth of Nations, edited by E. Cannan vol. I, p. 30.
 (註三) A. Amonn, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, Ss. 7-8.
 (註四) Ricardo, Principle, of Political Economy, McCulloch edition pp. 7-10. 小泉教授譯岩波文庫版八頁參看。
 (註五) Bonar, Letters of Ricardo to Malthus, p. 237.
 (註六) 左右田喜一郎氏「經濟哲學の諸問題」一九五頁。
 (註七) Böhm-Bawerk, Gesammelte Schriften, Ss. 209-229. 參看。
 (註八) A. Marshall, Principles of Economics, p. 348. 大塚氏譯(舊分冊三)五四頁。
 (註九) 詳細は拙稿「價值論と平衡論」(本誌二十二卷十號一七六—八頁)及び「ソルラヌミカッセル」(本誌二十三卷十一號)參照。

號)參照。

- (註一〇) V. Pareto, Manuel d'économie politique, p. 246.
 (註一一) 小泉教授「リカアドオ研究」序文參看。
 (註一二) 前掲拙稿「價值論と平衡論」及び「ソルラヌミカッセル」等。
 (註一三) 拙稿「價值論と平衡論」一七〇頁參看。
 (註一四) K. Diehl, Sozialwissenschaftliche Erörterungen zu David Ricardos Grundsätzen der Volkswirtschaft und Bes-
 tennung, S. 24.
 (註一五) 小泉教授「リカアドオ研究」一三四頁。
 (註一六) 詳細は拙稿「サミュエル・ヘンリーのリカアドオ批判」(本誌二十三卷一號)參照。
 (註一七) Bucharin, Die politische Ökonomie des Reniers, S. 88. 參看。
 (註一八) 拙稿「ローザンヌ學派創設者レオン・ソルラヌ」後段參照。
 (註一九) A. Amonn, Grundzüge der Volkswirtschaftslehre I, Ss. 133-4. 前掲拙稿「價值論と平衡論」二一六—七頁參看。